

【議事内容】

1. 関係機関より、発達障害児（者）にかかる支援事業、取組状況について
配布資料のとおり
2. 神戸市障がい者プランと提言書について
配布資料のとおり
3. 各委員からの主な意見、質疑応答
下記のとおり

（会長）

質疑応答の前に、最初に本日欠席の委員の意見を紹介いただきたい。

（事務局）

欠席委員のご意見をご紹介します。

- ・医療と支援機関の連携により総合的に支援をするため、情報の共有化が必要である。
 - ・小中高生の対応をする場合、どこに繋がればいいか分からない。切れ目のない支援をするため、どの支援機関に繋ぐのか検索出来るようなマニュアル的なものが必要である。
 - ・高齢者の支援はあんしんすこやかセンターがあり、各区医師会と連携した支援を行っているが、障害児は出来ていない。
 - ・医師は、校医がもっと学校に入り込むようにと考えているが、教育委員会は積極的に依頼してこない。もっと医師会に頼ってほしい。医師会に相談してもらえれば担当する医師や理事に相談し、有機的に動ける。医師はチームで動くものであり、看護師や他職種と連携をして動いている。
 - ・小児科だけではなく、内科や精神科、産婦人科も関わるが多いため、医師会が支援するよう、要望してほしい。
 - ・一見、就労が上手くいっているように見えても、なかなか続かない。定着支援事業所は、当事者にじっくり関わり、気持ちをくみとる必要がある。
 - ・学校と就労機関の情報共有のシステムを見直し、お互いに顔の見える関係にし、どちらがイニシアティブをとるのかを明らかにする必要がある。
 - ・移行支援事業所は、ソーシャルワークをはじめ、どういう形でアウトリーチし、関わっていくかが就労継続のための鍵となる。
 - ・就労訓練は職業センターが担い、その手前の部分を神戸市が担えばどうか。例えば、移行支援事業所への研修は職業センター、相談し始めた人への就労部分以外の研修を神戸市が担うなど、就労移行支援事業所の取り組みの情報を全市的に共有すべきである。
 - ・発達障害に関して、自立支援協議会のような支援機関の連携の場を作ってはどうか。
- 以上です。

(会長)

本日欠席の委員からも非常に貴重な意見をいただいた。医療も学校・教育のほうと積極的に連携していくということ。小児科だけ、精神科だけと、個々で関わっていくことが多いが、医師会の中でも縦割りという形で、小児科医も精神科医も内科医も入るような形でのサポート体制について提言いただいたと思う。また、就労について、学校とサポート機関との役割分担という話が出たが、これについて何か意見があれば、就労のほうからお願いしたい。

(委員)

ハローワークでは、障害者の就職支援という観点の中に準備支援というものがある。今回、学生等への支援の取組でも準備支援という言葉が出ているが、もう少し現実味のある活動をしたほうがいいのかと思う。神戸市の中にも色々な機関があるが、ハローワーク神戸もまだまだ個々での活動であり繋がりを持っていない状況なので、関係機関と顔の見える付き合いを積極的にしていくことが具体策として必要だと思う。

(委員)

障害者職業センターに関しては、現在、厚生労働省の検討会において連携の在り方が議論されており、29日の労働政策審議会でも色々な意見が出ていたが、障害者職業センターの役割についても見直していく必要があるということが議論されていた。移行支援事業所等を含めた支援機関の研修という役割をもっと強化してはどうかという意見も出ているので、全く同じような方向性が出てくるかもしれないと思う。

(委員)

特別支援学校に関しては、特別支援学校知的高等部に就労の職業コースがあるので、3年間かけて就労に向けて力をつけていくという取組をしている。子どもによって状況は様々であり保護者の意向もあるので、短い3年という期間でどれだけの力をつけていけるかが課題と思っている。今後は、そういう取組を考えていきたい。

(会長)

一般就労された方のその後はどうか。ハローワーク等の関連機関との連携は取れているのか。

(委員)

教育委員会のほうでも、就労してから定着に至るよう卒業後もサポートはしているが、やはり教師は学校での業務が主で現場に出向くことは出来ないため、就労関係の再任用職員を採用し学校を支援するなど、教育委員会の中でもそのような取組をしていきたいと思っている。

(会長)

移行支援のほうでは連携など問題となるような点はあるのか。

(委員)

移行支援の立場でいうと、今言われていたように連携すれば就職の確率は上がり定着していく可能性も上がると思う。ただその連携の仕方が問題で、今大学生の支援をしているが、やはり幼少期がどうだったという情報提供があれば、丁寧にマッチングしていけると思う。また就職した後、労働局や職業センター等との関わりを密にすることが出来れば就職への押し出す力が上がり、定着率もかなり上がっていくのではないかと考えている。

(会長)

移行支援でのサポートについて、どのように連携を図っていくかが非常に大きな課題になっていると思う。次回までに連携の仕方について、上手くいった例やモデルとなるようなものを提示していくことも必要なかと思う。他に就労における課題について、何か意見があればご発言いただきたい。

(委員)

就労支援事業所の中身がもう少しオープンにならないかという意見があったかと思うが、私自身も全く同感である。就労支援事業所といっても皆同じような活動をしているわけではなく、事業所がそれぞれ独自で考えた支援をしていると思うが、それが本当に支援となっているのか疑問もある。また、巡回支援をしている放課後等デイサービスも同様に、どのような特徴がありどのような支援をしているのか具体的に分かるように、ある程度オープンにしてもらえたらと思う。大手の事業所も頑張っているが、小規模の所でいい仕事をしていたり、中堅所で本当に支援になっているのかと疑問に思うような対応をしていたりするところもあったりと、本当に様々な状況だということを利用者の方々から聞いている。2年間ということだが、その間我慢すればいいという問題ではなく、やはり事業所の支援内容がオープンになっていくことが重要な課題かと思う。

(会長)

中身が分かりにくいというのは発達支援に関わる他の事業所等も同じかと思うが、どのような情報発信をしているのか。

(委員)

就労移行については、就労支援事業所の一覧を冊子にしているので、それを見ていただくのが分かりやすいと思う。また昨年度はコロナの影響もあり、各事業所の特徴などが分かりやすい動画の作成などもしていると思う。ただ、そういう動画があるということを手早く発信出来ていないと思う。実際に支援している内容が効果的かどうかということは、就労移行の場合は就職率という数字があるので、そこを確認してもらった方がいいと思う。どの事業所がどのくらい就職出来ているかということを見えるようにしていくことが必要になってくると思う。

(会長)

事業所の実績やどういったことをしているかということが、利用者にはなかなか見えにくい。また利用者だけでなく支援者にも言えると思うが、障害福祉課はどのように把握しているのか。また、実態をつかむときに難しい点などがあればお願いしたい。

(委員)

先程の話にもあったが、障害福祉課のほうで事業所ガイドブックという冊子を作成しており、どこにどんな事業所があるかということは掲載しているが、サービスの詳しい内容や一般就職に結びつけたかまでは認識出来てないという状況である。また特別支援学校の話があったが、卒業後に就職するというをしごとサポートに登録している所もあり、その手続きをしてもらうとその後継続してサポートしていくことが出来るため、定着支援に結びつくと思っている。ただ、まだしっかりとした仕組みが出来ておらず、学校によって様々なので、今後はそういった情報も共有出来れば良いと思っている。

(会長)

サービスそのものの質や内容が分かりにくいということだが、家族の立場からそのようなことで悩んだり相談したりすることはあるのか。

(委員)

神戸市の場合はセルフプランを導入しているので、色々な情報を見比べて選択出来る保護者にとっては、就労移行支援事業所に限らず放課後等デイサービスでも、自ら選択し進めていくことが出来ると思うが、子育てだけで精一杯で支援が必要な場合には、セルフプランではなく事業所の紹介や相談も出来るような市のシステムがあればありがたいと思う。

(会長)

障害者支援課では相談支援の強化等について考えているのか。

(委員)

神戸市ではセルフプラン率が非常に高いということで、ひとつには相談支援を行う場合、介護保険でいうケアマネージャーのような人材支援が非常に少ないということが課題になっている。特に児童であれば9割近くがセルフプランという状況で、相談場所や福祉施設の情報が分からないということが大きな理由になっていると思う。相談支援体制の強化については、昨年度から取組を始めており、事業所への支援としては、相談員を増やす取組について補助金などの制度を作り強化を図っている。ただ数を増やすというだけでなく、質の向上ということで、各区の相談支援センターや自立支援協議会などのネットワークを通じて、相談支援員をバックアップし力をつけてもらうという取組を積極的に進めていく体制を取っている。遅かったかもしれないが、事業所に限らず色々な相談支援所の力が大切だと重々承知しており、市としても積極的に取り組んでいきたいと考えているところである。

(会長)

相談支援だけでなく、その後のモニタリングもきちんと出来る体制が必要かと思うが、この1年でどの程度の従事者が、今後どこで支援しているのか、どこが行っているのかという事が分かるような体制が必要かと思うのでぜひお願いしたい。

では、今回新しく始めた巡回支援等について、これまでは気づかなかった点や巡回をしている良さがあればお願いしたい。数が多く回り切れないということがあるかと思うがいかがか。

(委員)

通所支援事業所の巡回支援について、他の委員からも話があったように放課後等デイサービスが増えているが中身が分からない。また巡回支援を行っているのは大学の先生で、臨床心理士と社会福祉士と作業療法士ということだが、実際に放課後等デイサービスや児童発達支援事業所に来ている子どもたちが必要としているのは学習支援が多いようなので、学習支援の専門家の巡回が必要ではないかと思うがいかがか。

(委員)

今年度から始まる事業であり、巡回する先生の強化についても今後併せて考えていくことになっているが、今年度についてはこの3職種の先生方をお願いしようと思っている。実際に巡回し、どういう支援が必要かということを確認しながら、新たな専門職の方をお願いするという事が出てくるかもしれないので、そのような体制を整えていくことも併せて考えていきたいと思っている。

(委員)

こうべ学びの支援センターが行っているアドバイス巡回は、学校のほうからは好評いただき、実施して良かったと思っているが、これは継続支援ではなく単発の相談になるので、アドバイス巡回によって学校でどのような体制を整えるのか、校内での支援をどれだけ多くの教員に周知していけるのかが課題になるとしている。

(会長)

学校での状況等の報告をいただいたが、こども家庭局のほうから、就学前の引継ぎと学校との情報共有やその難しさについて報告願いたい。

(家庭支援課長)

神戸市療育ネットワーク会議の中で見えてきた課題は、就学前に通っていた幼稚園や民間の保育所、保育園等は色々あるが、それぞれが各々の支援をしており、小学校との情報連携をするのに共通のものを持ち合わせていなかったという事である。会議の中で、どのような情報を保育園や幼稚園などから提供していくべきかということも議論して、まずは情報の共有を図れるような体制を作りたいと思っている。

(会長)

情報共有をどこまで行うのか、個人情報の保護をどうするのか、家族の承諾をどうやって得ていくのかについて、学校のほうからはいかがか。

(委員)

やはり学校に入ってくる前に、もう少し子どもの状況を把握できていればなという事例が多く見受けられる。小学校入学前の入学前健診を前年の秋から冬に行っているが、やはりそれだけでは子供の状況を把握するのは難しく、今後どうやって早期に発達の気になる、配慮の必要な子どもを見付けるのかということ、各関係機関と連携しながら進めたいと思っている。

(会長)

学校だけでなく、医療機関の間でも情報の伝達は難しいという話だが、発達障害における児童精神科の分野と小児科での情報の共有ということ、また医師会の中でも色々な会を縦に結びつけるような所はなかなかないと思われるがそれについてはいかがか。

(委員)

やはりバトンタッチをするというのは難しいと思う。それまでずっと付き合いのある小児科の先生から移行していくというのは、ゆっくりバトンタッチしていくにも一定の助走ゾーンが必要となり、その時期は一緒に診ないと仕方がないということで、行ったり来たりしてもらうことが必要になると思っている。先程の学校医の話にもあったが、共同で支援する期間・時期と、そういう場所が必要になってくるのかなと思う。どのように作るかということ、例えば会長から私だとお互いに知っているので、情報共有のためのやり取りや一定の期間一緒に診療することも出来ると思うが、個人的な繋がりがなければなかなか難しいため、やはりそういう場所が必要だろうと思う。

(会長)

先程、学校医と医師会の話もあったが、医師会では現在かかりつけ医の研修等もされているとのことだが、今後は医療のほうでも更に色々な形でのバックアップを考えていただきたいと思うがいかがか。

(委員)

色々とお聞かせいただき、沢山の事業をしているが、それぞれが単体でされており連携が出来ていないということが明らかになったが、それぞれが何をやっているのかも分かっていない。誰を診ているのかも見えていない。だから繋がっていけない。やはり相談支援員というキーパーソンが必要であって、高齢者に対するケアマネージャーのように色々な事業所と繋がれるシステムが出来れば、その人を中心に数をこなしていけるのではないかと思うので、そういうものが必要になってくると思う。

医師会では地域支援委員会というものがあり、自殺対策が最初に出てきた時に、医師会の中で

地域支援委員会を作って、鬱病対策としてかかりつけ医が積極的にやっという事で取り組んだ事例がある。これは現在も継続しているが、発達障害児者に関して何か取組があるかという、残念ながら神戸市医師会では専門的な取組は行っていない。医師会が関わっているのは1歳6ヶ月健診や3歳児健診で、29ページにあるように早期発見が約9%と多いことに驚いたが、これがどこに繋がっているのかは分からない。

医師の中で児童心理・児童精神をしている方はとても少なく、発達障害を診断できる医師は非常に少ない状況にある。ではその中でどう対応していくか。かかりつけ医がどこに注意すれば早期発見できるのか。一般的な座学だけの研修ではなく、どういう検査・テストをすれば一般のかかりつけ医でも早期発見することができ、専門機関へ繋ぐことが出来るのか、その辺が今のところ見えてこない。まだまだ体制を整えるのに時間がかかるのかなと思う。やはり発達障害者支援センターが、総合療育センター、学びの支援センターを中心として横に繋がるような体制作りをしていかなければならないし、医師会としても早期発見と子どもに対するケアとしてかかりつけ医がどんな対応できるのか、マニュアルのようなものを作成していく必要があるのかなと思う。

(会長)

臨床面や教育の面でも関わっている委員は、その辺りについてはいかがか。

(委員)

教育との関係で思っているのは、実は今日もあったのだが、障害があるため学校でどうしているか悩んでいる場合に、学校で特別支援コーディネーターという先生がいて相談にのってもらえるという話をすると、聞いたことがない、知らないと言われる。学校内での問題について、診療所が学校と直接連絡を取ることも可能だが、学校で相談にのってもらえる場所があるということをお伝えしても、親御さんは学校に相談するシステムが分からないというか認知されていない。特別支援コーディネーターという名前を出すと親御さんが驚かれるから名前を出していないのかもしれないが、こちらとしてもどう対応していいのか分からなくなる。随分前にも話したが、学校内で特別支援コーディネーターという役割はあるが、本当に専任してその仕事に関わっている先生がいるのか。連携ということと言うと特別支援コーディネーターの先生の役割も連携に繋がると思うが、十分に力を発揮出来るような体制になっているのか、すごく気になるところである。人が足りていないという話になるかとも思うが、今あるシステムや役割が十分に活かしているのか、十分に検討いただきたいということもいつも感じている。

(会長)

特別支援コーディネーターの役割など、保護者の立場から見ていかがか。

(委員)

特別支援コーディネーターというのは各学校におり、年度初めに紹介しなければならないとの通達もあり、何年も前から義務化されていると思うが、親御さんが知らないというのは学校に

も問題があるのではないかと思う。

(委員)

大抵の学校は4月の学校日より周知している。お子さんの事について何か相談があればコーディネーターにと周知していると思うが、やはり保護者にとっての一番の窓口は学級担任になるのではないか。学級担任に第一段階の相談があった時に、そのような内容でしたら特別支援コーディネーターの先生も一緒に聞かせてもらってもいいですかという対応をしているのが大半の学校かと思われる。

(会長)

コーディネーターと学校の先生との連携、その中での繋がりというのが大事なのかと思う。時間が無くなり申し訳ないが、他に何かあればお願いしたい。

(委員)

新しい計画の中に放課後等デイサービスへの巡回が盛り込まれているという事は進歩かと思うが、放課後等デイサービスの中身が見えない。また、他の事業所に関して何がどうなっているのか、質の問題なども確認していかなければならないのかなと思う。新しい計画が出来たから終わりではなく、実践して更に深めていくことが大事かなと思う。

(委員)

発達障害の方について区の支援センターでの受入れも進めているという事だが、毎日型の居場所を行っている当事業所は、毎日型の位置づけについても少し検討していかなければいけないというところで、現状としては個別支援の充実と個々の課題に応じた支援を行っていくことを考えているところである。現実問題で言うと、個々の目標が就労支援事業所に行くことであったりB型に行くことであったり、また生活介護に行くことであったりするのだが、次の目標に向かってどう支援していくのが課題になるかと思う。今日話を聞いていると、全体的にきれいに幼児期から就労支援へ結びつけるという感じであったが、当事業所の利用者の方たちは今からどうやって就労支援に結びつけようか、まずは来ていただく、というところからなので、そういったところから役割を担うよう進めていくにあたり、もっと関係機関の方と連携を深めていきたいと思う。

(委員)

特別支援学校から卒業後どのように進むか、就労先は結構整理が出来ているかと思うが、一度就職したが離職してしまった後に仕事を探す時に、どこに相談していいのかわからず迷われ、非常に悩まれている方が多いように思う。私共はしごとサポートだけでなく生活相談から発達相談まで一体の窓口になっているのでお互い連携することが出来るが全ての事業所がそのような形になっていないので、どのように繋げるかということが非常に重要なところかと思う。

(会長)

本日は非常に限られた時間の中、現状の報告と情報発信が上手く出来ていないという事、繋げていく必要があるという事を議論いただいた。

次回までにこれらを整理しながら、3月に提出した提言書の内容がどの程度実行出来ているのかということも含めて報告いただければと思う。それでは事務局より今後の予定等の説明をお願いしたい。

(事務局)

委員の皆さま、限られた時間の中で有意義な意見を頂きありがとうございました。今回は提言に関する事業の説明、それについてご意見をいただくことになりましたが、今回はもう少し方向性などをお示しして、課題を実現するための意見等をいただき、方向性が間違っていないかを確認しながら、すぐに取り掛かれるもの、長期的に時間をかけてじっくり取り組まなければならないものと様々でございますので、そのあたりを充分調整をしてお示しさせていただきたいと思います。次回、今年度中にもう一度この会議を設け、ご説明をさせていただきたいと思います。日程につきましては後日調整させていただきますので、よろしくお願いいたします。

(意見票)

1. 強度行動障害の問題について、

- ・福祉と医療の課題を検討して欲しい。
- ・特に親が力を失っていく時に誰が支援していくかを考える場が必要。
- ・医療だけでは難しい。

2. 特別支援コーディネーターの方が誰なのか分からないとの意見があったが、他の人が見て分かるようにバッチを付けたり、共通に分かるようなマークをつけるとかするのはどうか。